

思想傳達法に就て : 論説

著者	川田, 鐵彌
雑誌名	龍南會雜誌
巻	3 1
ページ	2 1 - 2 8
発行年	1894-11-28
その他の言語のタイトル	思想伝達法に就て : 論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/4466

よ、所謂歴史上の法則なるものを、求めんと欲するものが、如何ほど、極端ある試みをあすや、一例を
舉げて、其の流弊の極まる所、殆んど笑ふべきに至るの証を示すべし。エルンスト、サッセが書に、『精
神奮興の徴候としての、生活、戦争、疫癘、時疫等に於ける、種々ある有機的無機的の働きの興隆は、大
陽の定期の膨脹と共に變化する、引力の關係に基くものなり』との説を載するは、往昔陰陽師なるも
のが、天象を占ふて、國家人事の吉凶禍福を判斷せることを思ひ出されて、眞に抱腹の至りなり。因り
て惟ふに、『太鏡よ、花山院遜位のことを、陰陽博士の安陪晴明が、天變によりて知れるさまを、まこと
じやかに書きしるしあり。若し右の説にして眞ならんには、晴明どころ、さすがに、後世に聞へたる
陰陽家だけに、殆んど、千年の前に近き時に於て、早くも、所謂歴史上の法則あるものを識れりといひ
真ならん。

(完結)

思想傳達法に就て

川田 鐵彌

琵琶の水は深く、芙蓉の山は高し、此山水明媚の土は上古より言靈のささこふ國として自ら誇りたる國
柄あり。然れども人々相互に思想を交換し、事物の理を究むるは其天性にして、恰も生れながらにし
て犬の吠え、車の鳴くと一般ありと云はれ、風の口さきも其迂を笑はんとす。蓋し吾人人類は最初野
蠻蒙昧にして、冬は土窟に蟄し、夏は樹下に棲み、草根を食とし、獸皮を衣となせる姿にて、禽獸の如
き言語を有せざりしとあれど、日月の經過すると共に、今日の如き文物粲然たる開明の域に達せし者
あり。

論より証據、現今にても赤道直下亞弗利加土人、北米ヒクトリヤ土人、其他野蠻人は其赤兒を屠殺し

て食物とあす有様なれば、言語などの数は僅々數ふ可き程にて、手眞似、呼號等に由り意を通じ、實に其境遇禽獸を去ること遠うらざる風ありと云ふ。思へば人類の祖先も斯くやありけん、此の如き賤劣蒙昧にして事物の理を覺らず、唯情欲食欲のみに耽りし頃は、人々の思想淺薄にまて、只手眞似などして思想を通せしかと、日月の経過するに従ひ、遂に思想を表示する符號などを發明し、千歳の下百歳の上聖人君子と相交り、東西相隔て、相語るの便利を得るに及べり。請ふ試に先づ弘き意味にて、世界人類思想傳達法の發達順序の大略を述べん。

(一) 手眞似とは身体の舉動を以て思想を交通する方法にして、例へば手を舉げて人を招き、兩手を合せて助命を乞ひ、腹を撫で、飽きたる意を示し、手を左右に振りて物事を辞する等一々枚舉する違あらず。人類野蠻幼稚の頃は此方法を専ら使用せり。今日と雖も未開人種の間には言語甚だ僅少なれば、此方法に由りて思想を交通する事多しと聞く。其他諸文明國に於ても、此方法を時と場合とに應じて利用する事少からず。例へば小學教師の兒童を教ふる際、生徒をして容易に理解せしむる爲めに此方法を用ひ、又演說者の聴衆をまて感動せしめんが爲めに種々の手眞似を爲すは、吾人の目撃する所なり。此方法は東西至る所とまて、通せざる事なき思想を傳ふる方法ありと謂つべし。

(二) 呼號 一種簡單なる聲音を用ひて思想を表はす方法にして、例へば人間の情聲、牛馬の泣聲等の類あり。今牛と云ふ意を示さんと欲せば、先づ其四肢を地に就けて牛の歩む様を眞似せば、以て其獸類あるを知らしめ、更に手を頭上加へ角を生せる様を眞似せば、是に於て角を有する獸なる事を知らしむるなり。されども手眞似のみにては充分に其意を傳へぬす、よりにて呼號を用ひて「モー」と云ふと、始めて牛ある事を知るに至らん。此方法は手眞似に比ぶれば應用の範圍狹しと雖も、亦古代言語

のとき時に思想を通せし一方法と謂つべし。

(三)言語は聲音を以て思想を交通する方法あり。人類は鳥獸に比すれば一層靈妙なる聲音を有するのみならず、感受する聴官は能く種々雑多の聲音を判別する作用をば、自然淘汰の結果、遂に聲音を以て周密なる思想を示すに及べり。そも初めは人間日用の少數言語を作りたる迄なりしが、漸次進化して遂に澤山の言語を組織し、以て人々相互に交通の便を得たり。若し此言語なからんは、何を以てか自由自在に胸中の感慨を述べ、不平を語り得んや。

(四)繪畫も亦思想を表はす道具にして、手眞似と同じ普通に使用せらるゝ者あり。例へば森々たる山中を行く際に路に迷ひ、問はんと欲するも人家の目に觸れざる山奥ならむには、進退谷まるべし。さる處にて手にて指せる有様を圖に示したる道標を見れば、無言の中に道を教へられ、死地を經過するに至るべし、又市街諸店の入口に懸けたる看板に、往々繪畫の方法にて客の注意を惹き、思想を傳ふる風あり。此の類の例は枚擧するに遑あらず。我國の画家米偃は市俄高大博覽會見物に行きたる際、涼車にて荷物を見失ひし時、筆紙を執り繪畫の作用に因りて其意を通じ荷物を得たりといふ。以て繪畫は由りて相互の意志を交通し得るを知るに足らん。

(五)文字は思想を表はす符號にして、精細緻密に思想を發表し得る方法あり。峨々たる山嶽、漫々たる湖海、填々たる雷霆、皎々たる明月、皆清爽なる注意を喚び起て、胸中幾多の感慨を起さしめん時は、此力を借りて以て已が心中を天下に發表し得べく、以て千載の下英雄偉人と交ることを得べし。

以上の如き發達を致せし所以は、大古人類幼稚にして禽獸を去るゝと遠からず、事物の理は更にも知

らざりしかども、多少日月を経過すると共に、種々の境遇に刺激せられしより漸く思想發達し、遂には相互に其思想を交通えて、自他各便利を得んとするに及びたればあり。故に最初は手眞似の如き類に由りて思想を通じ得たりしかども、原來此方法たる自箇身体の舉動に由りて思想を表せんとする者あれば如何に巧に變化するも、千差萬別極りなき万物を寫し形せる事能はざるのみならず、他人の視官に訴ふべき不便あり。又言語にて思想を表示すれば、視官の日光燈火に頼るが如き比にあらずといふとも言語等は現在に限りて、未來に思想を傳へ遠方に意見を報すること能はず。是れ繪畫、文字の起りし所以とや云ふべき。之を圖解すれば下の如し。

一手眞似	Gesture.	今	時
二呼號	Cry.	今	
思想傳達法の種類	三言語	今	
	Word.	今	
	四繪畫	今	
	Picture.	今	
	五文字	今	
	Letter.	今	
		他	
		他	

上述のごとく、大古人類水草を追うて移住せし頃は、唯雜然として集りし者あれば、離散集合常あかみし故に當時は手眞似、呼號等に由りて、思想交換上不自由はなかりなかつたかとも、追々月日の過ぎ去るに及べり。埃及形象文字、フイニシヤ文字、印度の梵字、及支那文字等是有り。其異あるありといへども原來文字は思想を相傳ふる符號に過ぎざれば別に怪むことを要せざるあり。吾人は諸外國の言語は暫く措て置かず、我日本の言語、文字に就て少して卑見を述べんと欲す。

日本の言語は如何にして發達せしかは一々知るに由ずしと雖も、例へば禽獸虫類の名稱などは、西洋言語學者の説に據る時は、皆其啼聲をば人間の靈妙なる聲音にて眞似したるに源を發せりといふ。然れば鳥獸等の名稱に就き、新井白石、具原篤信氏等の擧げたる説は、吾人の甚だ了解に苦しむ所あり。思ふに我國大古は僅少の言語ありしも、類似、連想等より漸次他の言語を生じ、又二三言語を合はせて名けたりとあらん。今一二の例を擧ぐんに、天の語は清園殘夢氏の言靈名義者に由をば、其意義アは顯はれ出る靈。顯はるゝの義を示す詞あり、メは起り初まる靈、萌すの義をあらはす詞なり。紀曰天^{イグ}成而地後定云々。されば世に顯はれしものゝ始は天ありけり、アの靈義もメの靈義も當るなり云々。

と、氏は其著國語本義にても論せしが如く、文字は一々靈義を有すとの説あれば、斯く解釋せられしも道理なり。吾人は天と云ふ語の出來し由來に就き、未だ定見を立つること能はずと雖も、後世學者が意味ありて名けし者なりと云ふ説には容易に同意する事能はざるあり。蓋し野蠻蒙昧の時、人々の思想を傳ふる語は偶然聲の口より出るに任せて作りたる符號にして、決して事物の理を正し義を究めたる上に名けたる者に非らざればなり。兎に角一旦天と云ふ語出でしより、天は高く上に在るが故に上、頭、髮、神、君等の言語も導かれて出たるなるべし。

次に國名、例へば九州地を稱して筑紫洲と名くるに至りしは、四説あり。地名などの起源は此の一例にて推思せらるべしと信すれば、其説を擧ぐべし。

一云、此地形如木^ニ兔^ノ之^ハ跡^ニ故名^ス之^ヲ也、木兔之名、此云都久^ツ

二云、公望案筑後國風土記云、筑後國者、本與筑前國合爲一國、昔此兩國

之間、山有^三峻狹坂、往來之人所駕鞍轡被^三摩盡、土人曰^二鞍轡盡之坂^一。

三云、昔此^二塚^一上有^三庶猛神、往來之人半生半死、其數極多、目曰^二人命盡神^一、于時神筑紫君肥君等占之、今筑紫君之祖、璽依姬爲祝祭之、自^レ丁以降、行路之人不^レ破^三神害^一、是以曰^二筑紫神^一。

四云、爲^レ葬^三其死者^一、伐^二此山木^一、造^三作棺輿^一、因^二茲山木^一欲^レ盡、因曰^二筑紫國^一。

此の如き有様にて、少數の言語より次第に増加し、文字の發明をかりしと雖も、大に思想を交通する便利を得たるが如し。然るに文永年中の頃、卜部兼方氏が著はせる釋日本記に、

漢字傳^ニ來^{セシ}我朝者應神天皇御宇也、於^二和字^一者其起^リ可^レ在^二神代^一歟、龜卜之術者起^リ自^二神代^一、所謂此紀一書之說、陰陽二神生^{ヒル}蛭兒^{コチ}、天神以^二太占^一而卜^レ之、乃卜^二定時日^一而降^ル之、無^ク文字者豈可^レ成^レト哉云々。

と、これ上古文字の有る説を出されたる始あり。さるを平田篤胤氏は、此釋日本紀の説を基として、古社僻邑等に往々現存せる彼の朝鮮の諺文と云へる文字に類せる日文四十七字を以て、神代文字なりと確定し、神字日文論を著して其説を主張せり。此日文の外に天名^{アテ}、地鎮^{イヂ}、秀眞^{ホマ}など名稱したる數種の異体あるを、好事家は神代文字なりと尊重せり。當時一定の文字なかりし理は、諸君の既に知る所あらん。大同年中に齊部廣成氏が著せる古語拾遺に、

上古之世、未^レ有^二文字^一、貴賤老少口々相傳云々

とあるを見ても、上古言語ありて文字なかりしを知るよ足るべし。然るを中古以來の神道者が上古に文字あしといふは不都合ありとの思考より、文字を僞作せしは原來間違うたる話と謂つべし。

言語ありて文字あかりまが故、一種無形の文章にて年を経過せしが、紀元九百年代の中葉、應神の朝に三韓を服從せし頃、百濟の使阿直岐、易經、論語、山海經、等を貢す。此より彼國と往來頻繁となりしかば、始めて漢字を借りて我國の言語を寫す事とせり。當時言文一致の姿にて、單音語の文字を借りて重音語を寫し、故、甚だ不便ありしが、漸く年を経るに従ひて人心簡短の書方を望むに向ひ、紀元千四百年代の頃に、片假名、平假名の二種を發明する事とはせり。是に於て日本固有の言語、文字出來たれば、思想傳達上益便利を得るに及びたり。

此の如く吾人の祖先は後世子孫の爲め一定の文字を定められ、語格、文体等をも調へられまかば、後世子孫は以て自由自在に精細緻密の意志を表し、相互に思想を交換する便利を得たるは至幸といふべし。然ること嘉永六年米艦浦賀に丁字の錨を投せし以來、諸外國との交際年々頻繁にあり行き、彼を知り已を知るの必要起り、志ある者は歐米諸國の言語文字を學ぶに汲々として他を顧慮する暇なき姿とあり、加ふるに維新前後は内乱東西に踵で起り、人々武藝に意を注ぎ文學事業は一時絶え居たれば、其反動として文學上の有様は今日の如く亂雜無法とせり。此模様にて進行すまば、思想傳達法の機關たるべき文字、言語益錯亂、動もすれば一國獨立の体面を汚すに至らむかも計られず。先きに羅馬字會、假名字會等の設置ありしも、其實當今文學上の有様にては國權擴張上不得策ありとの掛念より出でしあらん。外山正一、末松謙澄氏等の主唱するが如くに、今更ら文字上大改革をなすべしや、將又舊來の和漢混交の書方を正しく用ひて思想を傳ふべしや、こは隨分研究すべき問題あり。思ふに一定の方法に従ひ言語を定め文字を寫し、後世子孫をして悲境に沈淪せしめざるやうに百年の大計を爲すは、此亂雜無法の時代に生れ出でし吾人の任務あり。然るに今日の文學社會を見るに、

各々學問隨分上手なれど近視眼者流多ければ、目前の利害を見るに汲々として一も遠大の志業に従ふ者あぞ。深山大澤龍蛇を生ずといふ、熊本の土、山高く清水し、龍田山邊此人を養ふに適すべし。諸君、亞細亞洲裡、安南に暹羅に緬甸に、到る所とて産業の發達といふ文字は美なれども、是等は皆歐洲諸國の占領權の下に發達せる者あらずや。天山の月、戈壁の沙漠、皆往事を追想し暗涙にひせふ種あらざるはあし。今や亞細亞の事を語らんとせば、如何に悲歌慷慨の文字を羅列せざらんと欲すとも得べからず。此中に唯獨り我日本は有望有爲の國柄にして、昨は至尊東洋の平和を永久に保たせられんが爲め宣戰の詔勅を降させ給ひ、爾來海陸二軍連戰連勝の報に日々接するは甚だ壯快の至に堪へず。尙此際に維新以來文學社會の乱雜無法を正し、文武其秩序を得ば、國光益發揚し、後世の史家相評えて、芙蓉の山高く、琵琶の水深し、此山水明媚の土、人ごとに笑ひ、家ごとに樂む、美なる哉風土やといはん。豈に亦た愉快あらずや。

雜 錄

日光山採集記

教授 中川久知

日誌。廿七年八月廿一日午前九時、第二高等中學校二部（動植物學科志望）生脇谷洋二郎氏と共に上野停車場を發し、同日午後四時、日光町に着し、近傍の淡水を探り、廿二日裏見の瀧を経て中禪寺に達し、廿三日男鉢山（海拔八千九百尺）を攀じ、同夜中禪寺湖（海拔四千五百尺）に上曳を試む。廿四日白根山麓の温泉場に宿し、夕刻再び其近傍の湖中に上曳を施し、廿五白根山麓を徘徊し、戰場ヶ原赤沼